



魔法の力

出久根達郎

紙が無くては、人は生きていけない。それはそうだ。お金も、紙である。私は古本屋だから、紙のおかげで生活ができる。電子ブックは商品にならない。思えば私は生まれた時から、紙とは切っても切れない縁がある。父親は小さな印刷屋を営んでいた。もの心づく、その辺にある紙に絵を描いて遊んでいた。印刷用の用紙を汚されるので、閉口した父が、いわゆる「破れ」(印刷物の傷もの)をどうさしてくれた。

私は得意になって描きまくった。絵はうまかったのである。近所の子が、次々と所望する。私は喜んで進呈する。ところが子の親が、ある日、血相を変えてとなりこんで来た。縁起でもない、と私の絵をつつ返す。図柄ではない。用紙である。黒枠が印刷された破れであった。戦争中、父の仕事は、戦死者の挨拶状を刷ることだった。それ以外の注文が無

い。印刷屋をやめたのは、そういうことも理由だった。

やめて、父は物書きになった。新聞や雑誌の読者文芸欄に応募して、賞品や賞金稼ぎを始めたのである。原稿用紙は、例の破れを用いた。裏白の破れに、定規で枠を引き、四百字詰の用紙を作った。さすがに黒枠の紙は使わない。それは下書きや、メモ用にするのである。父が紙を惜しむこと、お金以上であった。父にしてみれば紙が金を産むわけだから、当り前かも知れない。もっとも一家が食えるほどの稼ぎはなかった。

父親の性癖が、むすこにそっくり伝わった。私も紙を粗末にできない。小説の下書きは、裏白のチラシを使う。細かい文字で(これも父譲り)隅から隅まで記す。推敲が終わると、市販の原稿紙に清書する。そのようにして書いた作品で、ある賞をいただいた。チラシの原稿が評判になった。すると友人たちが、お祝いだとか、段ボール一箱分の裏白チラシを送ってきた。数人が半年がかりで溜めたチラシである。読者からも、送ってきた。折角の好意である。断るわけにはいかない。捨てるわけにもいかぬ。

と、小説の下書きだけでは使い切れない。ファクシマリの送信票に、活用した。これなら毎日、何十枚も消費する。



出久根達郎(でくね・たつろう) 1944年、茨城県生まれ。中学卒業後、月島の古書店「芳雅堂」を営むかたわら文筆生活に入る。92年『本のお口よこしですが』で講談社エッセイ賞を、93年『佃島ふたり書房』で直木賞を受賞。他に、『行蔵は我にあり』『本を旅する』『隅っこの「昭和」』など著書多数。

大いに気をよくしていると、ある日、送信先の友人から、文面が読みとれない、と苦情を言われた。「サンマが三匹で二百八十円、という字が見えるぞ」と言う。チラシ広告の裏つりが、そのまま送信されたらしい。誰も指摘してくれなかったが、言っただけ悪いと思っただろう。

私は今はメモ用紙に使つくりたいが、裏白のチラシを見つけると、捨てるのもったいなくて、必ずよけて溜めておく。結構な量になる。カミさんは貧乏たらしい、と眉をひそめるが、私は逆に豊かな気分になる。紙にはそんな不思議な力がある。子どもの頃、貧しかったが、たくさん紙に囲まれていたため、むしろ贅沢な生活をした思いがある。カミさんは、これがお札だったらねえ、と溜息をつくけど、お札どころでない、人を満足させ元気にさせる魔法の力がある。紙が無いと生きていけない、と言っただけはそういう意味もある。

PAPER Q & A Vol.7

Q. 紙の原料として、どんな木材が使われているのですか?

A. 製材に不向きな木や、紙をつくるために植林した木です。

紙の原料となる木材は製材残材や製材に不向きな低質材が多く用いられます。

丸太から四角い柱を切り出すと残る三日月型のフチも、私たち紙パルプ産業にとっては貴重な紙の原料です。また、製材に向かない曲がった木や芯が腐った木、森を育てるために切られた木材なども、大切に扱っています。最近では、海外を中心に植林を行い、原料を育てる取組も進んでいます。

私たち紙パルプ産業は、木を大切に扱い、森を育みながら、皆様のお手元に紙をお届けしているのです。

パルプの原料となる木材の構成比

製材残材	23.6%
低質材	70.2%
間伐材	4.3%
古材	1.9%

資料：日本製紙連合会

次回は12月7日号、中山恭子さんです。